



相撲隠書

印

79
1131



門子多
號 1.131
卷

式守蝸牛撰



相撲隱雲角

不許數外
千部必絕



相撲隱雲解序
練鼓之勢不驚厚生
取永賴則畏強之士以
角力為戲具試也第一
如戰陳也
有部署師人
呼此為行司指揮是掌

卷之四

猶元帥出軍令約束不
明申令不熟部署之眾
也之乞五軍而不知法
力士之罪也填然鼓之
兩雄接牙前虜不撓目
不逃蚤累無失周旋無

究焉且畏法之知進不
知退者一於教也後無
陰教先無陽案左主攬
之也乎不廢者精於智
也部署之職以四時戒
衆庶以春撻古以夏試

易以壯為戲以有治古
 於是值
 直公觀之則修法乞概
 圓扇与指揮東西力古
 習以為考与後進退周
 旋之為始可以精也振

古己來好角力者皆勇
 捷之古也羽之臂將之
 所以不忽之也武守凡
 作角力隱雲解讀序于
 宗也來轉之事當學之
 角力之子未之學謹然

不可解，既而寸角力
古固不以素言為淺，亦
識此書也。案其序，第序

子尋序

寸鳥題



相樸隱雲解自序
夫察相樸之勝敗者，勝
者如樹植，敗者如丸轉
也。者，此兒童之所知也。
及至嫌疑之際，微妙之
機，熟技者不能詳辨焉。

隱雲解序
况於他人乎、若嫌疑微
妙之機而不能明辨、則
何部署之為矣、故苟有
弗辨也、辨之弗明、弗措
有弗行也、行之弗篤、弗
措、人十能之、已千之、宜

矣哉、予弱冠好之、學之、
直不知乎之舞之足之、
蹈之、壯年頗得辨儀容、
今也老矣、雖有覺意味
深長、不能從事于茲、於
是隱焉、古來相傳之秘

隱雲解序
五

及先生之遺稿、間有錯
 簡、故補不足、削有餘、解
 難、讀、釋不通、別有寬政
 三、辛亥、夏六月
 君王御覽之法、令儀式、
 今追補之、以題曰相樸

隱雲解、遂自序以述其
 大體、二三子以其近、勿
 忽、云爾、寬政五癸丑歲
 秋七月

式守

蝸牛



好書と名道は心事なること
ふりて賣買と済むるは心
深く好む人にもとめ味と
あつて中々あはれぬ
と云ふものなり

公印

相撲隱雲解

◎ 目録

- 一 本朝相撲之流觴
- 一 朝廷相撲之始
- 一 寂手役之始
- 一 司行事之始
- 一 横綱之許
- 一 吉田追風之先祖書
- 一 上覧之一式

- 一 上覽土俵之古實
- 一 同相撲之勝負附
- 一 同行事之式
- 一 四拾八手之古法
- 一 立合之意味
- 一 七體七足之虛實
- 一 相撲之批判
- 一 投手業之理解

以上

相撲隱雲解

○本朝相撲之濫觴

日本相撲之濫觴略傳曰
我國相撲之技藝權輿乎神代矣

ト昆タリ藐ハトナクト讀權輿ハハジマルナリ上古
 神代ノ頃天ノ牟力雄ノ命岩戸ノ前ニテ其扉ヲ取テ
 千里ノ表ニ投トアリ然ハ相撲モ力ヲ以テスルニ似
 タル故ニ如此出ル歟依テ神代ノ相撲サダカニ不知

○朝廷相撲之始

素ヨリ日本ハ東方之國ニシテ位陽氣ナル一萬國ニ勝
 レリ人ノ氣象モ又同シ則 人王十一代推仁天皇ノ御
 宇出雲ノ國野見宿称大和ノ國當麻厥速朝庭ニ召レ鳥
 角カコレ日本相撲之始也宿称力増テ厥速ヲ取テ引落
 シ脇腰ヲ踏折勝タマウ是ニ依テ大和國當麻ノ里ニ於
 テ領地ヲ給ル永ク朝庭ニ仕シム是菅原ノ先祖ニシテ
 今其末流正ク有左相撲浪人ノ分永ク縁ニタヨツテ仰
 之角カトハ相手ヲ痛メ或ハ踏殺ス相撲トハ別也略傳
 曰角カハ殺手ナリ是カ爲ニ手ヲ禁ジテ不取是志賀氏

ノ定ル所吉田氏ノ傳ル處是而已

○寢手役之始

其後專相撲アリト踏義禮甚タ混雜シテ争ノ端ヲ開ク
 故ニ 人王四十五代聖武天王ノ御宇神龜三年諸國一
 統滿作シテ相撲ノ業モツハラ起ル則朝庭ニテモ行ル
 ベキ詔有テ國中ニ高札ヲ建テ力士ヲ召ル左右ニ寢手
 役ヲ定ラル寢手トハ寢ニ手ヲ取ノ寢上ノ寢リト云心
 也次ヲ寢手脇トモ又助手トモ唱フ其次ヲ力士ト云フ
 合テ今是ヲ三役ト号ク畧傳曰

其義禮之式勝負之决苟モ非得其人不可議定也又遴選
 其畧得清林者於近江ノ志賀舉以宸手役ノ一人ト定ム
 相撲ノ規式禮義亦勝負判斷依怙ノナキマウニ委ク力
 士皆下知テ請テ正クスル其人ヲ選テ是ニ任セラル然
 ル故ニ相撲人ノ内何レヲ遴選セン皆人吹舉シテ清林
 ヨリ外ナシト申義也宸手ノ官相撲ノ司後行事ノ始也
 而始テ節會ヲ行ハル此時ヨリシテ志賀清林へ相撲ノ
 司ヲ仰付ラレ相撲人作法勝負之理皆清林之風儀ニ從
 ヒ一統正キナリ朝庭節會ノ禮東西ト云フナク尤右ト

唱フ尤方ハ元方右方ハ寄方ト見ヘタリ尤宸手一人ニ
 限リ天長地久之法横綱ノ傳一人之土俵入古ハ斤屋入
 ト云テ土俵ニ出テ手ヲ二ツ打ツ乾坤陰陽和順ナリ足
 三ツ踏ハ天地人之三才智仁勇ノ三徳合セテ五ツハ木
 火土金水仁義禮智信ノ五常ナリ始横綱ヲ帶シテ足踏
 ナナス貪星根巨星丈祿星存文星曲廉星負武星曲破軍
 星是各七星也七ツ踏シメ氣ヲ臍下ニ納ム則動力ガサルナリ
 依テ氣銳ニシテ利釵ノゴトク以テ勝負ヲ爲ス正ク直
 成形ヲ以テ出入ヲナスハ則内外清淨六根清淨天下泰

平國土安穩五穀成就第一ノ傳授也宸手役三十歳ヲ越
 テ是ヲ持ツ其故ハ若時ハ筋骨不定心氣動ク畧傳ニモ
 二十五三十歳迄妻帯ヲ免サストアリ諸數百藝トモニ
 心ヲ一ニシテ形銳トイヘ氏内靜ナリ故ニ相撲ハ唯柔
 ナ以テ善トス剛ナルカ故ニ不動柔ニ九ク假初二モ怒
 一ヲ慎ム是則無我ナリカアレ氏表へ出サス敵ノ虚見
 エレ氏危ヲセス只内ヲ修ラ以テ宸手ノ官ト云故ニ高
 位高官之眼前ニ出素裸ノ勝負ヲナス又内ニ一物有
 時ハ鏡ニ移シ見ルガ如ク平生誓古ノ他念ナクスル時ハ

自然ト妙術出テ内ハ流ル、水ノ如シ唯慎ンデ心ヲ磨
 クベシ天下泰平之政ヲ爲ス人以テ慎マズンバ有ベカ
 ラズ
 節會相撲モ世々打續キ志賀之家モ末流ト成ル其後
 淳和天皇天長年中志賀之氏族モ斷絶ス

○司行事之始

人王八十二代後鳥羽院之御宇吉田豊後守家永志賀家
 之傳ヲ得テ隱レナキ一世之聞アルニ依テ朝廷へ召レ
 テ相撲行事ノ司官ヲ給ル則吉田追風寛政三辛亥年六

月十一日 上覽ラシ二月追風先祖書并右一件ケシ元二記ニス

○横綱之許ヨコツナ

谷風タニカゼ江ノ許エノシ傳授之寫ウツシ

免許

一横綱之事

右者谷風タニカゼ之助依相撲之位令授與シ

以來斤シ入リ之節迄相用セ下ノ山ノ仍此件

寶政元酉年十月十九日

本朝相撲シ之司シ御ノ事ノ十九代

若田追風判

朱印

小野川江ノ證狀之寫

證狀

當時久留居沙抱

小野川表之序

小野川喜之序今度相撲力士故實
門才石加ハ仍證狀也件

寛政之酉年三月十九日

本朝相撲之序以事十九代

吉田追風判

朱印

右許狀證狀遣シ候取沙汰有之寺社奉行牧野備前守殿
御尋ニ付細川越中守殿家來吉田善九衛門答書寫

○吉田追風先祖書

御尋ニ分書上

夫相撲之起ハ天照太神之御時ヨリ初リ朝庭ニテ
ハ 聖仁天皇ノ御宇ニ相撲之節會行レ候ヘ氏末
其作法端而已ニ罷成勝負ノ裁斷難定 聖武天皇
神龜年中奈良ノ都ニ於テ近江國志賀之清林ト申
者ヲ召御行事ニ定ラレテヨリ相撲之式委ク相備
リ子孫相續之處多年ノ兵亂打續節會行レ不申候
志賀之家モ自然ト斷絶仕候
後鳥羽院文治年中再相撲之節會行レベキ處志賀

之家斷絶之上ハ御行事相勤ベキ者普ク御座
候處私先祖吉田豊後守家永ト申者越前國ニ罷在
志賀家之故實傳來行事仕候旨遠 敷聞五位ニ叙
セラレ追風ト名ヲ賜リ朝庭御相撲之司行事之家
ト定メ置ルベキノ旨蒙 勅命此時召合ニ用ヒ候
木釵獅子王之御團扇ヲ賜ヒ代々相撲之節會之御
式相勤申候兼久之兵亂發節會モ中絶仕候
正親町院永録年中相撲之節會行レ候節十三代目
追風罷出如舊例相勤申候

一 元龜年中二條關白清良公ヨリ日本相撲之作法ニ
 流無之トノ御事ニテ一味清風ト申御團扇弁烏帽
 子狩衣唐衣四幅之袴下シ置レ候其後 信長公
 秀吉公 權現様御代ニモ度々御相撲之式相勤申
 候元和五年四月十七日於紀列和哥山 東照宮御
 祭禮奉行朝比奈惣左衛門殿ト申仁ト諸事申合勤
 申候依之御刀拜領仕候
 一 十五代目追風ニ至リ朝庭御相撲之節曾モ自然ト
 御中絶ニ成行申候二條殿御家ニハ相撲ニ付御懇

一 之筋目御座候ニ付他江罷出申度相願候處願之通
 相叶萬治元年ヨリ當家江相勤申候
 一 元録年中 常憲院様牧野備後守殿江成セラレ候
 節ニ相撲上覧有之砌彼方之御家來鈴木源右衛門
 卜申仁入門之御頼有之將軍家 上覧之式一通相
 傳致シ品々拜領物仕候
 一 元祖ヨリ私迫都合十九代前文之通 禁裏其外之
 御方々ヨリ追々拜領ノ品今以テ持傳相撲故實傳
 授仕來申候

一 當時諸國之行事并力士共免許私家ヨリ代々差出
來り申候

右之通ニ御座候以上

細川越中守家來

寛政元酉年十一月

吉田善九衛門

○上覽之一式

寛政三 辛亥年春相撲

勸進元 鍛山喜平治

差添

伊勢海村右衛門

右春相撲本所於回院境内興行仕候處町御奉行池田
筑後守殿御差紙ニテ勸進元差添罷出へキノ旨申來り
早速喜平治村右衛門罷出候處相撲 上覽之御内意ニ
付御書附下サレ候
同廿三日勸進元差添書附持叅之處土俵繪圖并相撲名
前二枚ツ、明廿四日持叅致スベキ旨申渡サレ翌日相
撲之式并 上覽御場所繪圖兩ヤウトモ池田筑後守殿
御役宅江差出申候

但土俵并四本柱引幕トモ伊勢海村右衛門
仰付ラレ請負ニ仕立上ル

同并六日池田筑後守殿御役宅ニ於テ喜平治村右衛門

江上覽相撲仰付ラレ難有旨御請仕候

六月二日場所見分有之相濟同日相撲取組相撲人惣人

敷人別書着出候且又右之通今度上覽被仰出候共相

撲人之儀随分萬事相慎之我雜ゲニシギ與之様手寄

共急度可申付段被仰渡候

六月五日又候喜平治村右衛門召出サレ筑後守殿御役

宅ニ於テ當十一日相撲上覽可有之旨仰付サセラレ

難有御請申上ル旦台來禁庭節會ノ祭事相勤候相

撲司御行事吉田追風未流吉田善左衛門被召出則罷

出言法之通相勤申候土俵場之儀勸進相撲トハ格式等モ

別ニ候故左ニアラハス

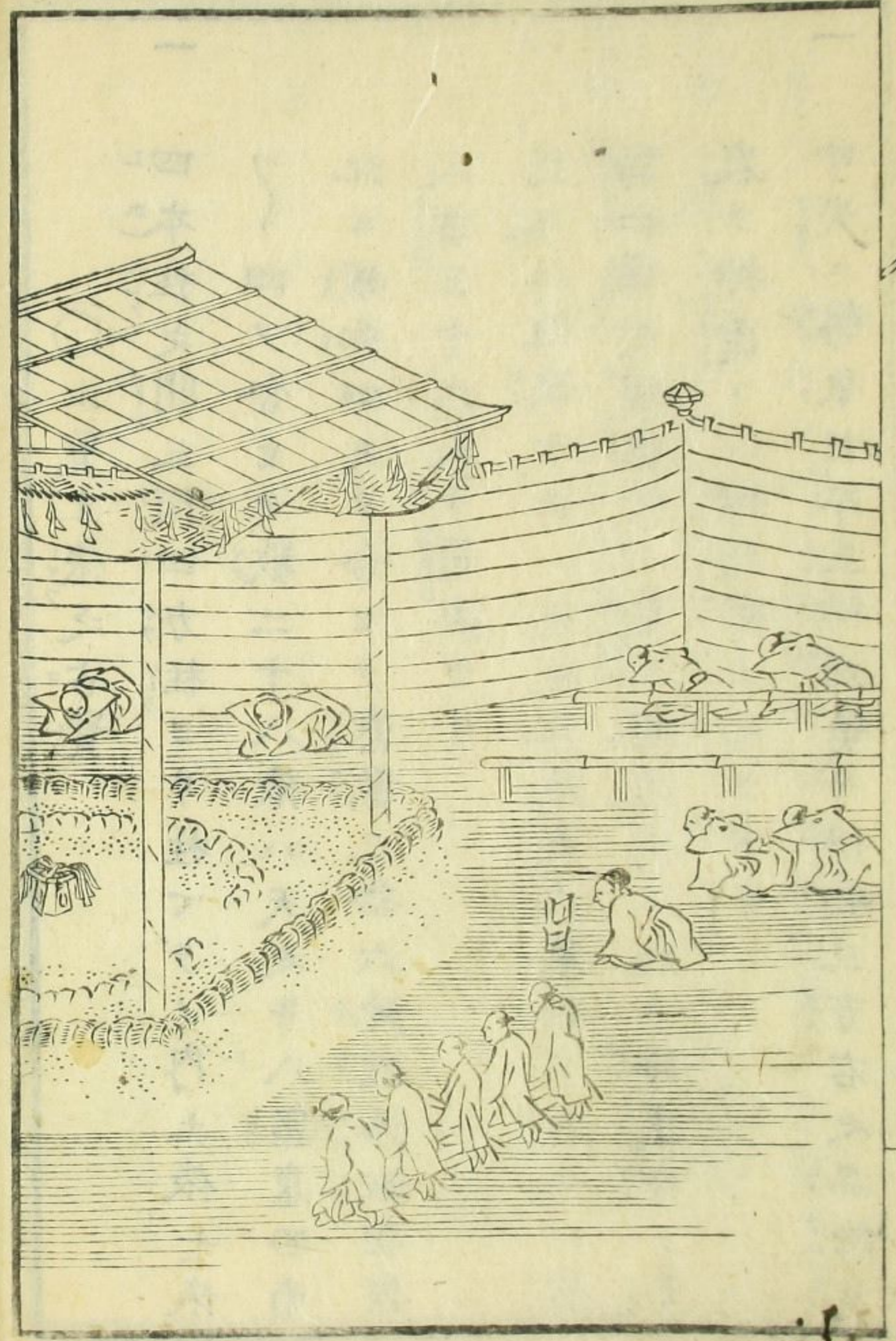
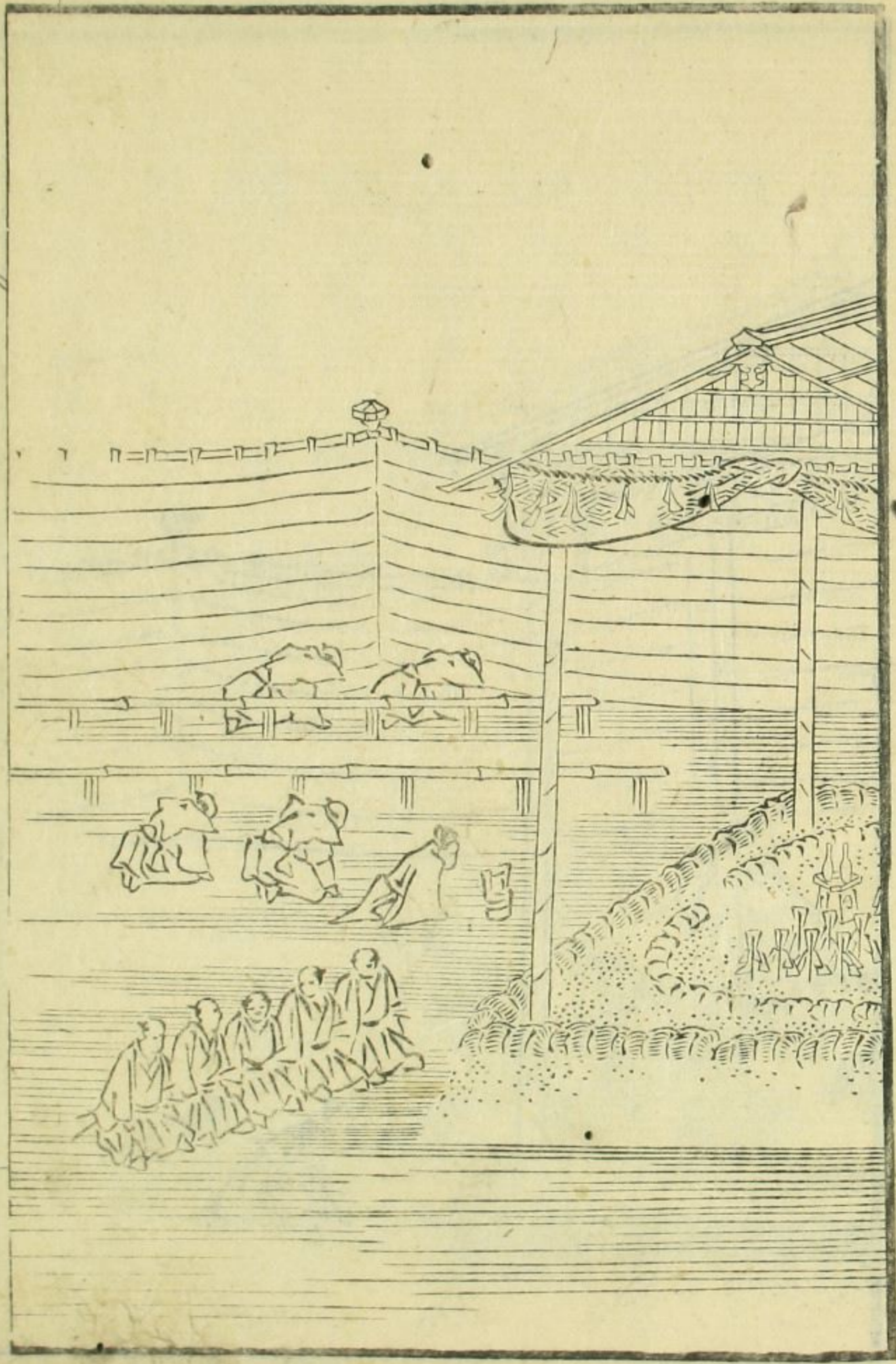
六月十一日曉六ツ時竹橋御門外御眷屋前ニテ惣年寄
行事相撲入殘ラズ深帷子麻上下帶刀ニテ相揃場所休
息所溜り江入り差扣罷有候

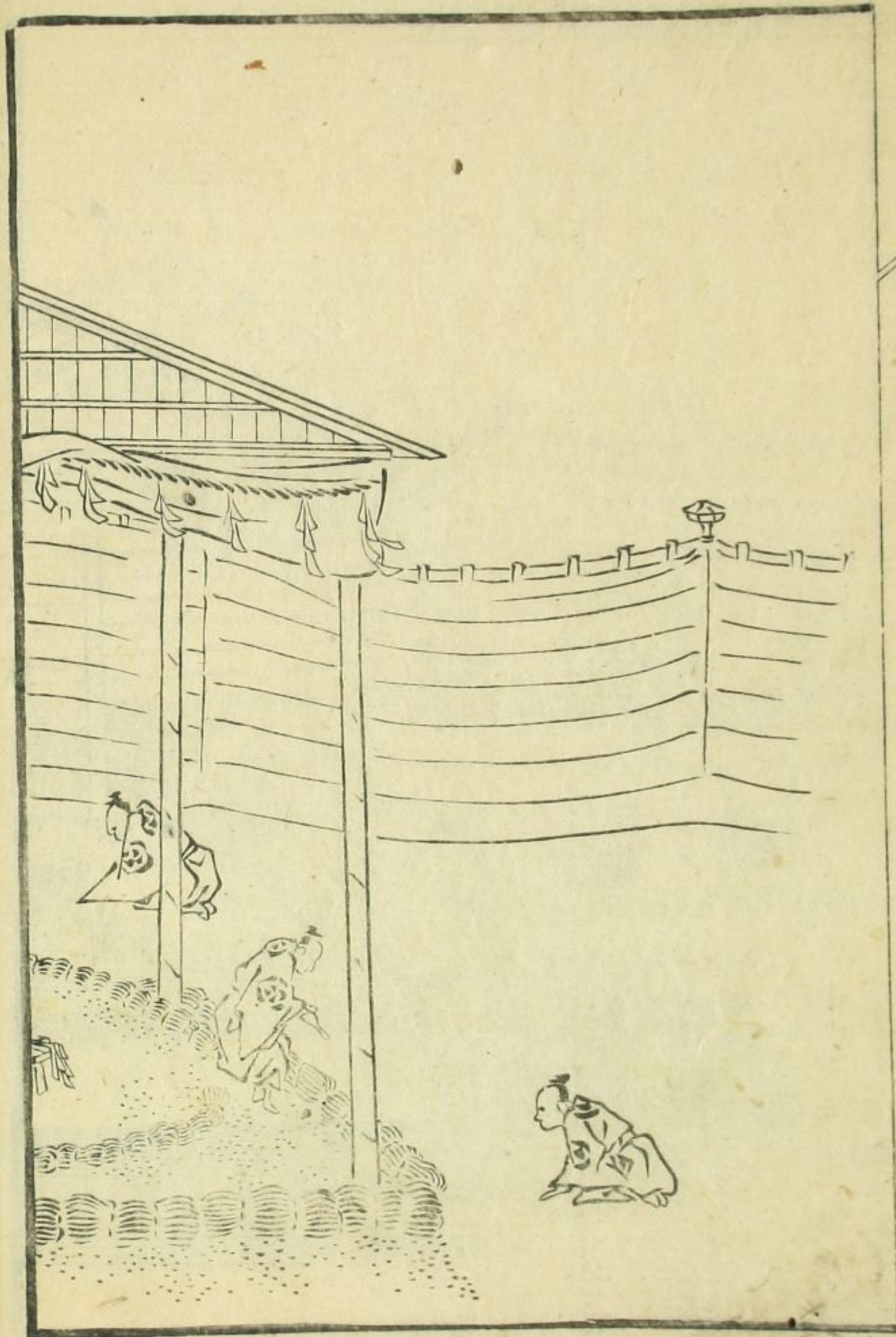
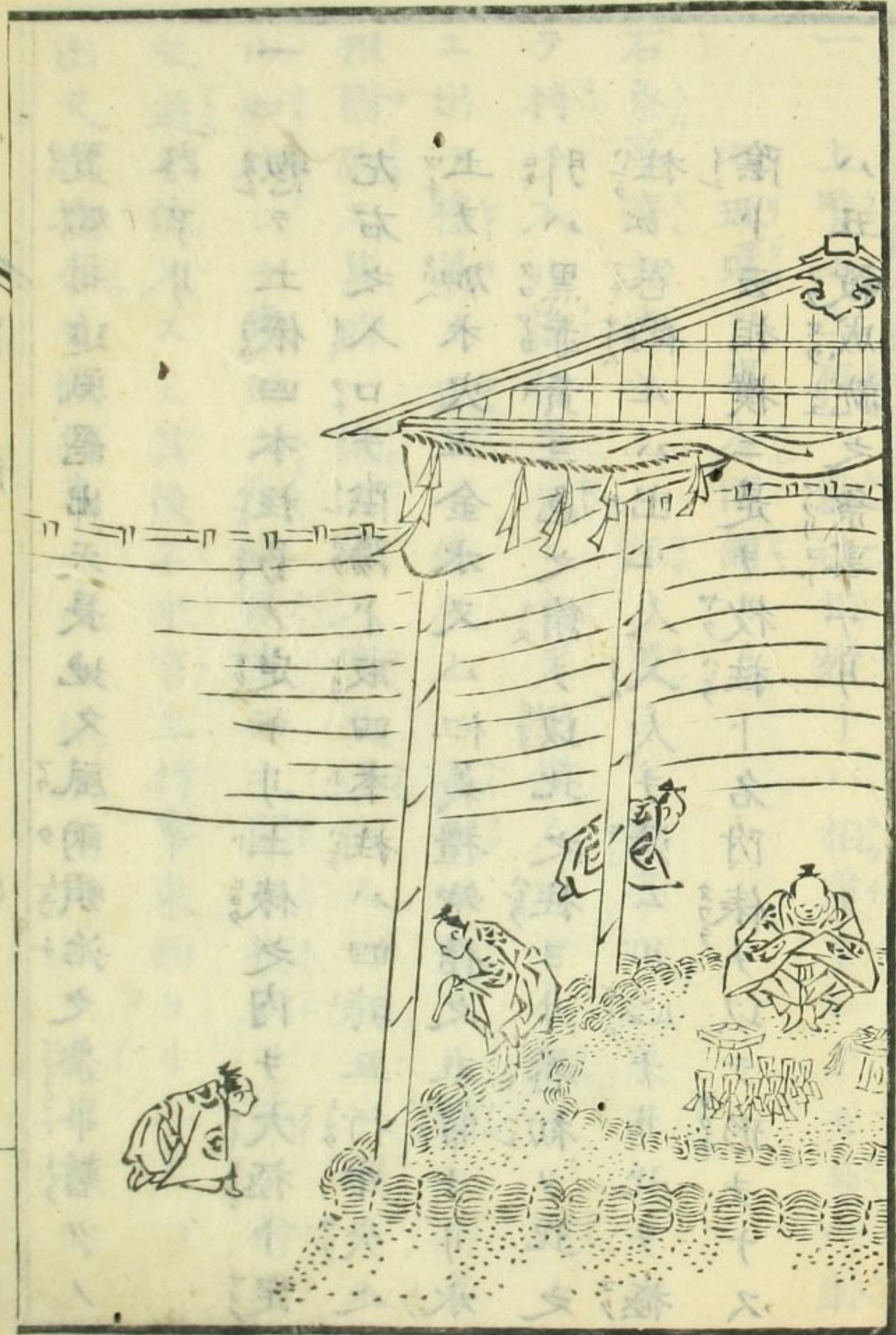
○上覧土俵之古實

一 四本柱之間三間四方柱ヨリ柱マデノ内土俵七俵
ツ 四ツ合セテ數二十八俵八天之并八宿東西南
北ニ須弥四天ヲ合セテ惣數三拾六地理汰釵相撲
久古三十六人ヲ司法ナリ

一 内丸土俵數十五八天之九地之六東西ノ入口ハ陰
陽和順之理也外ノ角ヲ儒道内ノ丸ヲ佛道中ノ幣
束ヲ神道コレ神儒佛ノ三ツナリ

一 中央ニ幣束七本立神酒屨斗供物三方右之品飾リ





陽
雲
角

置始司追風罷出天長地久風雨順治之祭事暫クノ内アリ

シキ

土俵

古実
ヤ

一 惣テ土俵四本柱易ノ定ナリ土俵之内ナ大極ト定
 左右之入口ナ陰陽ト取四本柱ハ四時五行中央之
 土ヲ加木火土金水又ハ仁義禮智信之五常ナリ水
 引ハ黒赤黄三色之緋ヲ以北之柱ヨリ卷初メ北之
 柱江卷納ルハ出ル人入人ヲ清ムル心ナリ北ヲ極
 陰ト云相撲ニ是ヲ役柱ト名附俵ヲ以テ形ヲナス
 ハ五穀成就之祭事ナリ

一 上覽之土俵ハ勸進相撲トハ相違ナレトモ易一躰
 之理違フ事有間鋪ナリ

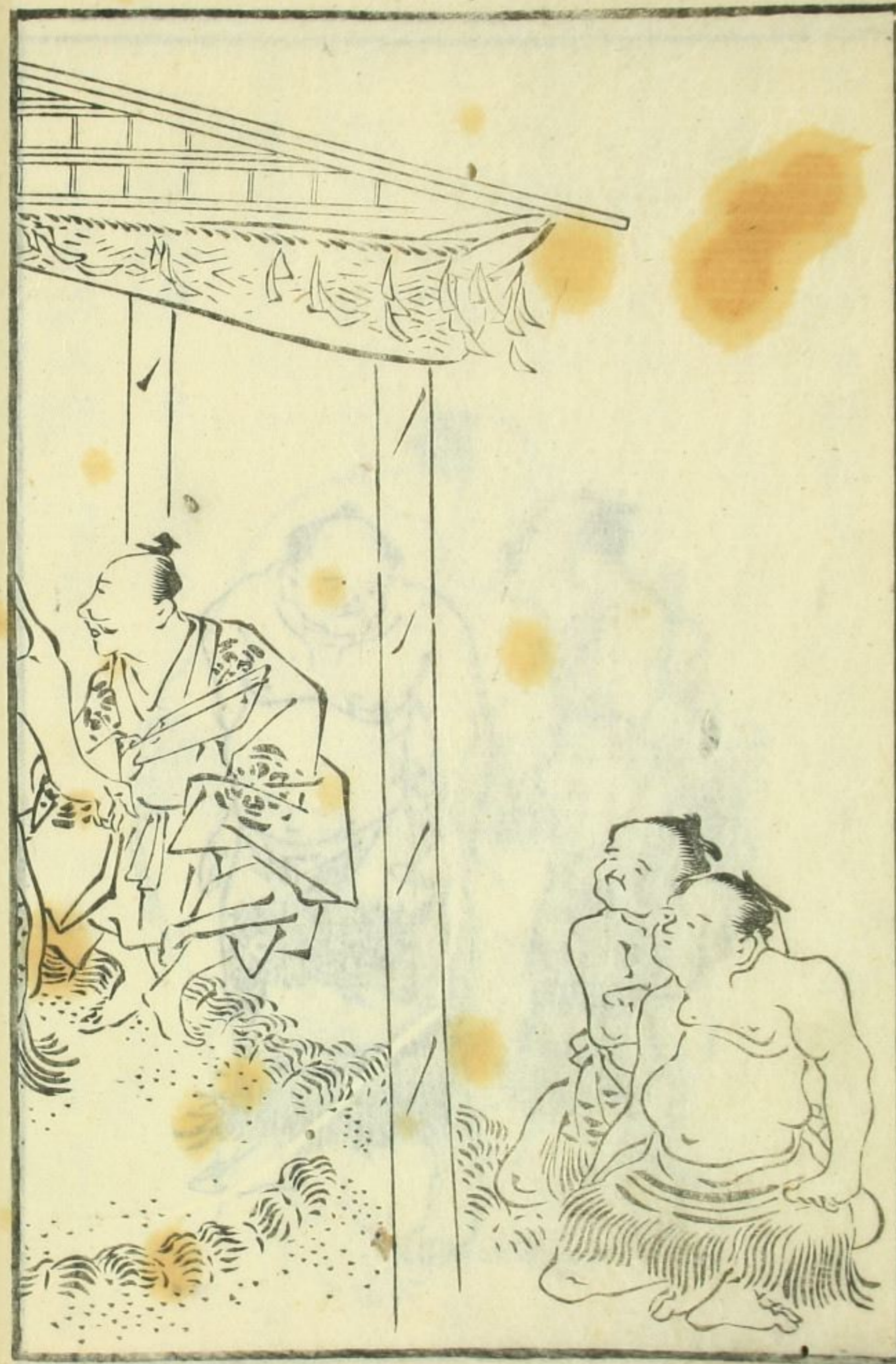
右祭事濟土俵之上ニ飾リ置品々行事四人東西ヨリ出
 テ持テ入ル後行事先ニ立テ相撲人二十人程ツ、段々
 ニ出テ禮義ヲ正シ土俵之上ニ平伏ス殘ラス揃ヒ行事
 相圖致ス其時一統土俵入濟又平伏ス一人ツ、圍ニ入
 ル如此シテ東西六度ニ濟東西之關取横綱ヲ帶メ繪圖
 之通土俵入スニ其後名乘言上行事東西ヨリ一人ツ、
 出又相撲合セ候行事一人土俵之内ニ入テ次ニ東西三





急雲解

十九



隱雲角

十九



了海魚



西之方誰ト高聲ニ名乗テ入ル其内白張着用之者水ト
 紙ヲ遣ス也相撲人土俵江掛ル行事聲ヲ掛テ中ニ立テ
 古法之如ク待ナシニ取組行事勝相撲誰ト名乗尤行事
 ハ代々残ラス侍烏帽子素袍着用ス合行事ハ素袍之肩
 ナ紋リ出ル又四本柱之元ニ行事四人平伏シテ扣居ル
 是ハ勝負依怙ナク見分ル事ヲ司ル右代リ々行事十四
 人ニテ相勤申候

○上覽相撲之勝負附

六月十一日上覽相撲取組

△此印勝

東

西

中入前

行事 式守見藏

龍ヶ崎	森ヶ崎	若松	尾上松	桂山
ナシキリ	コシナケ	マキナトシ	フミコシ	ワタシカケ
△	△	△	△	△
金碓	岩ヶ崎	與佐ノ海	錦野	吉野山

△ 千歳川

コシナケ

荒見崎

△ 櫻野

ヤクヲトシ

安宅山

△ 和田川

フコシノソク

今出川

△ 荒灘

ヒシリタシ

角ノ森

△ 清川

ナシキリ

角田川

△ 鳴見川

タシ

△ 鳴澤

△ 由良戸

シタラナケ

△ 豎川

△ 都山

フミキリ

△ 朝日野

△ 鷹ノ川

モチタシ

△ 上総野

△ 柴ノ森

ハ子

△ 筆ノ山

△ 入間野

ウキソク

△ 庁男浪

△ 初瀬嶋

チシキリ

△ 御所嶋

△ 鳴戸

ウチカケ

△ 和哥ノ浦

△ 雲林

ヨツテナケ

△ 淀渡

△ 時津風

ハ子

△ 黒雲

△ 熊ノ川

ヒキヲトシツメ

△ 杜戸寄

行事

式守秀五郎

△

咲ノ川

ナケタシ

濱風

△

荒澤

ツキテ

綾川

龍ヶ鼻

カイナニワシ

△

香取山

連

ツメ

△

荒海

常盤川

チシタシ

△

緑川

千渡ヶ濱

チシタシ

雪ノ浦

諏訪ノ森

フミギリ

袖ノ浦

楠

チシギリ

荒馬

△

枚ノ尾

ツメ

阿曾ノ森

△

關ノ川

フミギリノク

荒瀧

△

玉ノ井

ナゲノユリ

荒熊

△

伊吹山

カイナヒシリ

鷲ヶ嶽

△

鈴鹿山

ウワテナケ

岩ヶ關

△

伊勢ヶ濱

チシツメ

獅子ヶ洞

△

衰鳴

カイナニワシ

真鶴

△

出水川

カケワタシナケ

戸田川

△ 友^{トモ} 衛^{ヱリ}

ツキヲトシ

△ 關^{セキ}ノ戸

行事 木村庄之助

△ 梶^{カキ}ケ濱^{ハマ}

ツノ

△ 出^テ羽^ハノ海

ウキノク

△ 錦^{ニシキ}木

驚^{ワシ}ケ濱^{ハマ}

主^{ヌシ}儀^ノヲタリツメ

△ 官^{ミヤ}城^キ野^ノ

中入後

但^レ中^ノ入^リ之^ノ間^ノ相^ム撲^ム人^ノ江^ノ赤^シ飯^メ下^サレ候

行事 式守見藏

△ 緑^{キナンド}山

シタテナケ

△ 荒^{アラ}瀬^セ川

△ 八^{ヤチ}汐^{シホ}鳴^ネ

ツメ

△ 越^{コシ}柳^{ヤナギ}

△ 奈^ナ良^ラ山^{ヤマ}

ヒキヲトシ

△ 伊^イ勢^セノ濱^{ハマ}

△ 浪^{ナミ}分^{ワケ}

チシキリ

△ 柳^{ヤナギ}川

△ 曙^{アケボノ}

チシキリ

△ 江^エ刺^{サシ}川

△ 鷹^{タカ}ノ羽^ハ

ヒ子^コリ

△ 金^{カネ}ケ崎

△ 名^ナ取^{トリ}川

ヒ子^コリ

△ 紅^{ベニ}葉^ハ山

△ 讚^{サナヒ}岐^{マキ}川

チシキリ

△ 三^ミ百^{ヒャク}ヶ崎

△ 漆^{ウツク}川

ハ子^コタシ

△ 須^ス磨^マヶ關^{セキ}

△ 鶴^{ツル}ヶ岡^カ

ツメ

△ 增^マ水^{ミヅ}川

行事 木村庄太郎

△	加茂川	カモスカシ
△	飛鳥川	カラミナケ
△	神樂ケ岡	ウハテナケ
△	住ノ江	ウチカケ
△	袖ケ浦	ナシキリ
△	桐ケ崎	アチリカケ
△	更科	ソクキレ
△	和田ノ海	タシ
△	不破ケ谷	カイナヒ子リ
△	荒鷲	アラ
△	八雲山	ヤモ
△	亂獅子	ランシ
△	外ノ海	ソト
△	高尾山	タカ
△	廣田川	ヒロ
△	越ノ浪	コシ
△	秋田川	アキ
△	御崎川	ミ

△	和田ケ崎	タシ
△	琴ノ浦	ハナナシキリ
△	宮ノ川	ツメ
△	通リ矢	ツキナトシ
△	黄金山	ヨツテナケ
△	柘ノ尾	ヒキナトシ
△	甲斐ケ關	ヨツテモチタシ
△	手間ケ關	テ
△	室ケ關	ムロ
△	式守秀五郎	式守秀五郎
△	鬼ケ嶽	オニ
△	三浦瀉	サン
△	山分	ヤマ
△	荒瀨	アラ
△	富田川	トミ
△	岩井嘉七	イ

嶋ヶ崎

ナシキリ

不破ヶ關

虎渡

ハ子

象ヶ鼻

岩ヶ洞

ナシキリ

立浪

温海嶽

ハ子

神撫山

松鳴

フミコシ

秀ノ山

浪ノ音

ナシキリ

瀧ノ音

岩ヶ根

カイナニワシ

熊ヶ嶽

行事 式守伊之助

稻川

ナシキリ

鳴瀧

鬼勝

カケタシキリ

芦渡

名草山

ハ子

越ノ戸

和田原

ナシキリ

増見山

磐井川

ヨツテヒ子リ

達ヶ關

行事 木村庄之助

九紋龍

ヨツテツノ

柏戸

陳幕

ノトワツノ

雷電

行事 吉田追風

小野川 キマケ 谷 キガチ 風

スハテ 九八拾三番

弓弦扇子三役古法之通勝カチ之方江相渡ワタス
九ツ時相撲始ハジメリ七ツ時無滞相濟スム

○上覽行事之式

年寄三拾六人深帷子麻上下着用ニテ土俵場江代リ々
相結行事拾四人素袍ニテ侍烏帽子木劔ヲ帶シ追風始
土俵入之節柳色之素袍侍烏帽子着用ニテ土俵ノ上ニ
建タテチ鋪其シキ上ニテ相撲之古實言上ス後谷風小野川取組

上 覽

之節古例ニ依テ往古追風 禁裏ヨリ賜リタル紫ノ打
紐付タル獅子王之團扇ヲ持風折烏帽子狩衣四幅之袴
着用土俵之上草履 御免ニテ相勤候

司追風隨笏三人書役土俵之際ニ扣ル
行事名前

相勤候着用之裝束追風ヨリ傳之

右同断

- 木村庄之助
- 式守伊之助
- 式守秀五郎
- 岩井嘉七

名乘言上行事三人

木村庄太昂
式守見藏

式守留之助

式守善次郎

式守卯之助

力水役白張着用四人

式守武九衛門

式守金太郎

鑿山喜平治伊勢海村右衛門勸進元差添二付

土俵ノ後ヲ警固ス

木村松之助
式守松五郎

勝負附役麻上下着用四人

兼野忠七
今井源之丞
兼野兵藏
川喜田與五郎

上覽相濟候處南 御番所 木村庄之助式守伊之助召
呼レ投手之貌御尋ニ付四拾八手之貌認差上候工トモ
相分ラス是ニ依テ伊之助見藏白洲ニ於テ素裸ニ相成

其形カクシヲ御見ケシ分フナサレ御扣ヒカニ相成申候
右相撲一統トウ之者江御褒美ホウビトシテ白銀三百枚下シ置ナレ
候段タビ池田筑後守殿仰渡ナヒヒワツサレ候

○四拾八手之古法

四拾八手之古法ニ四手アリ頭カシラヲ以モツテスル一反手ソリヲ以テ
スル一捨ヒキリ。腰コシヲ以スル一投足ナケヲ以スル一掛カケ
右四手ヨリ十二手ツ、四拾八手ト成ナ

反ソリ

向反居反掛反寄反傳反撞木反一寸反キホウシヒシラ枕カカイ

ナ反鴨カモ人入イ着レクシキ反衣キヌカツキ

捨ヒキ

合掌カッセウ捨肩ヒキカマスカシ外無雙内無雙突落ツキオトシ逆捨ギャクリクシキ引
落オトシ出タシ捨ヒキリ卷落頭マキオトシカシラ捨カマ斤手カワク

投ナケ

上手ウラ投ナケ下手ナケ投引ナケ上矢倉ウツヤクラ下矢倉ゲツヤクラ着投ケヒナケカラマ投握ナケ投寄ナケ
投出タシ投手タヌキ拔腹ハハラ投八柄カラ投

掛カケ

二足掛ソクカケ一本掛ソクカケ内掛ウチ外掛ソト手斧掛テナノ泥障掛アナリ呼掛ヨヒ渡掛ワタリタグリ

掛掛モタレ水掛傳掛

凡四拾八手

摠テ手ノ名テ記セトモ業ニシテ甚危シ尤名ハ頓智ヲ
 以テ呼歟業ハ氣變ニナス處意味アル其數ヲ知ラス
 然レ凡皆心ノ一ヨリ出ル一物動サル故手足能自由ヲ
 ナス業ハ必九死一生也唯恐トハ相撲ノ極意ニシテ恐
 ト云字ナリ恐ハ一物ヲ内ニ置表ヲ和力ニ出ルヲ恐テ
 引ハ忍ウ突ハ忍ウ捨ハ忍ウタトへ勝事前ニ有トモ恐
 テ勝ヲ大丈夫トス堪忍ノ忍ノ字必忍ニアリ摠テ此意

味嘗古ノ妙術ヲ以テ委ク分ル是苦ンテ知ル知至テハ
 相撲行事ノ一事也

○立合之意味

相撲立合之意本來無一物也事有ハ虚也有一ト云ハ敵ヲ
 知ル也敵ヲ知トハ合手ノ得手勝手強弱ヲ知ト云ト是
 チ唯一ニ収メ忍テ立譬ハ業ハ則經外別傳也業ニテ勝
 トナカレ只心ノ一手夕トへハ經文ノ外ニ佛ニ成法ノ
 有ガ如ク氣治ラザレハ業變化シテ危シ其本亂テ未修
 ラズ然レハ不動トハ心動ガル也只一圖ニ忍ト云ハ忍

ルト云文字モシ堪忍カニシノ字也必勝カタニト思オモフベカラス負マシマシト
心得ココロ假初カカリニモ派手ハテナルテハ大虚キヨ也誠マコトハ思オモフスシテ成ナト
或人アルヒトノ歌ウタニ

何事ナニコトモタクムコトノ葉偽ハイツリツ風與思フトオモイテ出ニ實マコトアルラン

七體七足之虚實

強弱虚實之體

強時ツヨキハ必弱ヨクシ強者ツヨキ必勝カタニ非アラス弱者ヨクキ必負マシルニ非キヨス虚ト
見ミエル時トハ必實マコト也業スハ摠ステ強弱虚實變化キヨウニヤクキヨニツハニクスル者也真シ
劍ケンノ勝負ナラハ習ナラフフ不出ヲモツ思ヲ不成ケイコ誓古メウニツツハカリイツルノ妙術計出モノ

也然シカドハ一日イチニチモ怠オソシナク誓古ケイコスル時トハ妙術出イダテ其場バニ至イタ
几時ナニトキハ敵我テキキ共ニ強弱虚實能分ヨクワカル也依ヨテ一人ヒトノ妙術ト
云人々クニヒト得手エテアリ又心々ココロナリ

強柔弱剛之體

力強ツヨクト雖氣イヘモキ柔ヤワラカニシテ力チカラヲ殘弱ノスヨウク見ミレ凡内ウチ大丈夫也譬タトヘ
ハ相手オモテヲ見立ミタテ其程ホトニ會釋エニヤクシテ譬變出タトヘニイッルトモ本モトノ心ココロヲ
失ウシナフス是コレヲ強柔弱剛ト云心變ココロスルト勿ナカレ大關オホキノ氣位キイ芽イダ
一是コレヲ守モル

有無之體

變化スル本ヲ知テ敵ノ強弱ヲ知ル有時ハ無心無時ハ
有心唯己ニ勝リテ急サルノ心知ルヲ知ス體ニ敵掛
ル時ハ無勝時ハ有皆臍下之意味心ノ一手也

餘力之體

チカラ
ガチ遣フ時ハ餘ル不遣時ハ不足唯程ヲ知テウチハニ
心得堅キ物ヲ和力ニ遣ノ心カチ力ニ遣時ハ必餘ル

過不及之體

譬相手我ニ劣トモ無理ニ勝ハ不可也氣一旦ナル時ハ
危ク一言債事ノ理是以過タルハ猶不及摠テ此心ヲ可

知氣短慮ニシテ盛ナルヲ嫌フ

九死一生之體

摠テ業殘ス氣無一圖ニシテ果スヘシ勝負ニ二心ヲ嫌
フノ理是也又氣ニ長短有堪忍ハ芽極意也然トモ成ト
不成ニ意来テ成時ヲ九死一生ト云

一體一生一之捨

一體ハ心氣手足トモニ皆生ル處一ツ捨トハ業ノ名也
摠テ體ニ規有纒縛時ハ先江不搞亦不成堪真劍之勝負
故ニ我得手出ル其得手則規ナリ然故ニ得手ニ取組時

ハ心氣能収リ手足能自由ヲ為ス相手必其業ヲ不得殘
 故ニ一體一生一ノ捨是ヲ三具足揃フト云也此道ニ入
 テ十年ヨリ内規矩ニ當ル人稀也西行法師ノ歌ニ
 武士ノナラス相撲ノ夥シ明戸ノヒサリ鴨ノ入着
 此心ヲ知得ハ古ノ相撲ハ誓古ノ時モ行義ヨク規矩ニ
 合又業ノサエヨク戸ノ柱ニアタリヒサルカ如ト譽シ
 歌十リ

内掃外掃

手ノ裏表ヲ砂ヲ掃ト云フ強弱ノ理解アル共何レ砂ヲ

掃フ時ハ負也突手ニ似レ凡格別ノ意味アリ

突手突膝

突手モ突膝モ體ノ虚ヨリ出ル故ニ負也誓古怠ル時ハ
 心氣不収亦手足共ニ堅シテ自由ヲ不為唯氣斗リ急故
 ニ手足小柄木ヲ折ニ似リ其業ヲ氣ハ覺手足ハ覺サ
 ル十リ

浮矩高足

浮足ハ必足ノ浮ニ非ス心ノ浮ナリ高足ハ過ル足不足
 脚ノ名也譬ハ水ニ物ヲ浮ル如ク五體共ニ力ナク心ニ

及バズ又矩ト云文字ニ規矩ニ乘ルト書手足ハ心ノ眷
 族故ニ心ニ及サレハ形崩テ堪ルヲ不能畧傳ニモ心氣
 必應シ理解先ニ定ムト見タリ然ル故ニ行事ハ唯其心
 ノ一手ノ出ル處ヲ知ベシ必非見也

運再入之矩

忍ハ相撲ノ第一也前ニ如記善惡共ニ出ル所ヲ堪亦忍
 トハ上ヲ柔ニスルノ形内ハ堪テ大丈夫運トハ氣ヲ手
 足ニ通スルノ利再入ハ再入心一圖ニシテ能堪ニ心ハ
 變スルノ元ナリ故ニ是ヲ戒ム矩トハ非足摠テ業ニ氣

ノ乘ヲ知故ニ矩ノ字ヲ用足バカリ浮ト云テハ決テ無
 者也皆心ノ浮矩ハ業ニ通ルト可知故ニ忍テ勝少忍
 サレハ大謀亂ルト古語ニ言如ク業ハ則其機ノ乘處ニ
 テ浮舟ニ掉カ如ク智者之一失愚者之一得業ニテ勝事
 ナカレ只心ノ一手喻ハ古語ニ戰ヲ和ガルナラハ以テ
 勝ト決スベカラズト云リ一致スト一致セザルト也是
 ナ以テ心ノ勝心ノ負ト云也

○相撲之批判

夫相撲之勝ト云事モ負ルト云事モ皆我ヨリ出ル摠ジ

テ人ノ虚見テ我ヲ知ス是全ク其業至ラザルガ故ナリ
只誓古一日モ怠リナク勵我身ヲ飄テ不足ヲ尋功ヲ積
テ自然ト妙術出ルハ相手ノ虚ヨリ我虚ナル事先江知
我ト知故ニ其虚ヲ直シテ自ラ慎ム善惡トモニ人ニ十
シ皆我ニカケリ今相撲之業上達スルニ隨ヒ三ヶノ津ニ
名モ轟キ高位高官ノ眼前ニモ出ル藝也元邊鄙ヨリ出
テカ量大兵ヲ頼ンテ此事ニ入漸成熟スルニ至テハ泥
中ノ蓮ノ如シトヤ云ベキ然ル時ハ唯一ツニ心ヲ磨ク
ベシ象ト心ト鈎合サレハ真劔ノ勝負ニ至リテ見エ透

テ取也唯腹ノ中一物ヲ水晶ノ清ラカ成ガ如ク磨キ佩
カスル時ハ武士ノ行義亦器ノ一人ト呼ル、ニ至テハ
下ニ仁ヲ施スノ氣位ヲ守ヘキ事專一也儲己ガ腹中ノ
一物見エザルカ故ニ我耻辱ヲ知ス真劔ノ勝負ヲ爲ニ
及テハ人取ニ是ヲ知ル譬ハ我ヨリ劣ル者ト立合時ハ
先ハ能我ハ惡トモ可然又手ヲ免ニモ非ス其意味ハ只
其程ニ有ヘシ古人ノ云傳ヲ聞ニ立合テ行事團扇ヲ引
テ取組待ト云事ナシ是ハ延享ノ頃八角谷風立合ノ時
初テ待ト云シヲ聞尤陰囊隱ト名附テ廻シノ罽モ一

意

三

尺モ下タリ今ハ少モ下ズ如斯ナルカ故ニ作法亂レテ
 耻ヲ知ラス尤安永ノ頃迫ハ待無ニ取人モ間々見タリ
 懇望ノ方ハ能知所ナリ今ハ上手有テ各人無人皆利口
 ニシテ一圖ノ人稀也此所ハ其人ノ罪ニ非ス悲ヒ哉時
 勢ノ然ラレムル故也夫勝負ノ論アル時ハ東西ノ年寄
 行事三人立合テ數年ノ業ノ妙術掛分ル秤三人トモニ
 掛合セテ毫釐モ依怙ナク是ヲ分ル故ニ古法ニ權衡ノ
 決スル處必四拾八手ニ出ス右四十八手ノ内何々ト云
 手ノ名ニ競テ四分六分七分三分ト相分ル也又畧傳ニ

互ナル哉實ニ昭代ノ雄觀於斯爲盛言ハ誠ニ依怙ナク
 清ラカニシテ美々鋪物故天下泰平之見物是也故ニ未
 繁昌也ト云ル儀也然レ止事ヲ得ガル事アリテ曲テ
 諂古法ヲ亂ス今改ル時ハ却テ禍ト成事アリ悲哉其本
 ナ不辨相撲ヲ業トスル者ハ諸國ヲ周旋スレハ何國ノ
 者トモ師匠或ハ朋友ニ交テ別テ親子ノ如スルノ法也
 常ニ相撲ノ古チ有道ニ就テ正シ行義作法相撲ノ格式
 相守必下レル世ノ流俗ニ從ヒ邪路ニ入ベカラス今ノ
 有様ヲ見ルニ時勢ト云ナガラ業ハ未熟也ト雖大兵ニ

意云云

三十一

シテ其形能レハ是ヲ關ニシ曲テ皆敬フ去ハ事ノ意味
 甚踈ク身ノ程モ忘レ我意ヲ振フ畧傳ニ曰カ在テ法ヲ
 獲ニスルハ亂ノ階也カ有テ法ニ隨フハ治ノ具也夫又
 一ニ決焉トアリカ在テト云事ハ誠ノ役取ト云心法ヲ
 獲ニスルハ云ハ行事年寄ノ言葉ニ洩テ用ス是作法ノ
 亂レノ始ナリ又階ハ多ク登人アツテ下知ナラサル也
 カ在テ法ニ隨フ時ハ治世之道具作法古來ノ如クナラ
 ニ唯一筋ニ是ヲ守レト云事也今ノ立合ノ如クナレハ
 行事ノ團扇邪魔ニ成ル雙方氣改ル故ニ立所ヲ失フ其

本修ラサル故ニ手前ノ勝手計ヲ見テ論多シ年寄行事
 心腹ノ秤ニ掛ラサル故ニ判斷更ニ決セス行事モ亦古
 法ヲ失テ曲タルニ隨フ譬ハ取者ハ強キ時ハ見物羣集
 ナナス渡世タルガ故ニ第一是ヲ善トス爰ニ於テ法モ
 自ラ亂ル畧傳ニ曰不易行事官故ニ世々不艱相撲シテ
 行事ヲ艱シトスル者亦良馬伯樂之喻ニ類スル而已ト
 有リ行事官易カラズハ本相撲ノ司也相撲ヲ艱シトセ
 ズトハ世々關取ハ續ケル行事ノ一人ハ出來ニクシ良
 馬伯樂ノ喻ハ古文ニ見エタリ千里ノ馬ハ常ニアレル

伯樂ハ常ニシモ非ス野ニ生スル馬ヲ取テ正シク良馬ニ仕立高位高官ノ用物トナル是伯樂ノ徳也行事モ又相撲ノ規式法式又ハ心腹ノ一物居所ヲ知テ勝負ヲ分ル故ニ伯樂ニ譬テ云ルナリ

○投手業之理解

相手有テ立ツ其心氣ハ流ル、水ヲ留弓ノ弦ヲ切放シタル如クニ此意味堪忍テ腹一圖ニ成時ハ一物居所ニ有ル依テ業銳ニシテ白刃ヲ振カ如ク是皆心氣修ルカ故也摠テ業皆心ノナス處故ニ行事勝負ヲ見ル事目ニ

非ス心手足ニ通スルヲ知ト云然ル故ニ形ヨリ心ノ生スルハ早シ故ニ見ルハ遅ク知ルハ早シ第一之傳授也譬ハ體規矩ニ則ルト云ハ毛筋程モ不曲人々ノ得余有リト雖鈎合能上手ノ活シ立花之如クナリ又我手ヲ相手ノ脇ノ下江入ルヲ差手ト云又斤手ノ臂ヲ我腹江付相手ノ肘ヲツツト押ヘ尤ヲサス時ハ尤指右ヲスケ手ト云又足差足助足ト云摠テ差手助手トモニ腕首ヲ和カニ親指ト臂ニカヲ入ル心持也此意味ハ數多シト雖皆得手ニ傾ノ氣筋勝負ノ理解ハ我腹ニ的有テ取者ハ

負ヲ知り勝ヲ知ル其的ハ誓古ノ妙術故ニ誓古息ル時
 ハ的ナシ四ツ身ハ手足凡前ニ記如ク也上手ノ肘ニカ
 ナ入助足ヲ釣込テ割付ル相手曲テ我ハ直故ニ手ヲノ
 バサズ廻シテ取ル是ハ名術ニシテ意味多シ是ヲ物ニ
 喻テ云ニニ動テ心ヲ亂ンヨリ動カスシテ心ヲ治シハ
 何レゾヤ又行間鋪事ニ臨ンテ行テ義ニ還ンヨリ不行
 シテ然モ道ニ叶ンハ宜カラシカ此處ニ心ヲヒツク自
 知ベシ亦小兵タリ凡大兵ニ等ク唯和ク丈夫ニ見ル是
 ナ鹽梅ト云摠テ此意味ヲ辨テ見時ハ人ノ氣位真劍ノ

勝負故ニ明也業ノ形又取組ノ形繪ニ記テハ意味不届
 書記セ凡文ヲナス事不能此所ハ皆懇望ノ人々自得セ
 ラルベキ所也四ツ身ニテ上手廻シテ取テ同上手ノ足
 ナ相手ノ内股江蹴込心ニテ下手ノ方江迴ツテ落ス是
 ナ上手矢倉ト云下手ヨリ釣上ケ廻リナガラ合手ノ膝
 ナ我上手ニテ拂フ是テ下手矢倉ト云上手ニテ迴シテ
 取我腰ヲ少シ下ツテ我頭ニテ土ヲ拂フ程腰ニ掛テ投
 ル是上手投也下手投ハ相手ノ二ノ腕ヲ免サズ腰ニ掛
 テ投ル上手ヲ取テ頭ヲ上手ノ方ニ迴シ足ヲ抜テ引居

ルヲ出^シ投^ト云又迴^シヲ取^テ矢倉ノ如ク振^リ迴^スヲ八柄^カ
 投^ト云又相手ノ脇^ヲ江頭^ヲ出^シ相手ノ腕^ヲカツイテ下^ニ
 手ニテ脇^ヲ迴^シヲ取^テアケニ倒^ルヲ腕^ヲ反^リ居^テ向^テ江返^ル
 ヲ撞^キ木^ヲ反^リ諸^手ヲ差^レテ足^ヲ掛^レハ掛^反又相手ノ足ノ
 膝^ヲヨリ下^ヲ我^ノ肩^ニ當^テアケニ倒^ル、時ハ一寸反^ツマ
 取^リハ古人ノ傳^有レトモ今ハナシ掛^ハ皆人ノ知^所故^記
 サス捻^ハ手ニテスル業ノ名也同利害ナル故^荒増^テ記
 ス業ノ形ハ書^尽シ難^ク前ニ記^ス如^皆氣^變ノナス處心
 ノ一手ヨリ外^ニナシ故^ニ目^ニ見^ス口^ニ説^ス又人ニ教^ナ

事不能^レ替^古ノ修行^苦之^苦ニテ我^ト知^ル妙術也
 目錄^ニ記^ス拾^五ヶ條^早年ノ頃^{ヨリ}誓^古修行^之妙術^ヲ
 以^テ漸^クニ四^十八^歳ニシテ此^業ニ不^レ惑^五十一^歳ニシ
 テ意味^ヲ能^知ルト雖^燕雀^之質^短才^成力^故ニ皆^人々^江
 知^レ難^シ然^レ凡^見ル所^聞處^知ル所^一言^トシテ腹^ニナ
 キ事^ヲ記^ス今^此道^ヲ忒^ガ故^ニ聊^愚意^ヲ述^懇意^ノ人々
 江^贈ル尤^千冊^ヲ限^リ絶^板シ畢^ス

...

...

君子ハ其業ヲ業トスルガ故ニ腹心ヲ磨ク磨ハ明
 鏡如臺ト云リ我多年相撲ノ道ニ入テ其業ノ腹ニ
 有所ヲ知仕年ニテ空ハ至空漸天命ヲ知齡ニ至リ
 空ハ歸腹我學才ニ、非サレ凡儒佛神モ心ノ明鏡
 曇サレハ移ガ如ク成ヘシ相撲モ阿呼ノ空ニテ勝
 負之決スル所皆心腹也

空々々々我公も有明鏡
 月々々々ひておひやはまらん

相撲隱雲解 終

鳩牛

